

PROFILE

鷹野 誠

久留米大学医学部生理学講座統合自律機能部門



本年4月1日付で久留米大学医学部・生理学講座の主任教授に就任いたしました。新たなチャンスを与えていただき、リセットボタンを押したような、生き返るような思いで一杯です。

私は九州大学の出身ですが、医学部を卒業したのか山岳部を卒業したのか判らない、ろくでもない劣等生でした。当時山岳部長だった故・緒方道彦教授（九州大学健康科学センター長）の影響もあって、麻酔科での研修後、第二生理学教室（野間昭典教授）の大学院へ進学しました。当時の九大は、生理研から赴任されたばかりの野間先生をはじめ、神経生理の大村裕教授、赤池紀夫助教授、平滑筋薬理の故・栗山熙教授と、世界的な電気生理学者が集結しておりました。恵まれた環境で研究生活をスタートすることができたのは非常に幸運であったと思っています。

大学院ではすっかり改心し、心筋のKチャンネル、特にATP感受性Kチャンネルの制御機構の研究に従事しました。その縁もあってβ細胞のATP感受性Kチャンネルの大家であるF.M. Ashcroft教授（Oxford大学）のラボへ留学しました。折しも留学中に野間先生が京大へ転出されたため、帰国後、私も直ちに京大へ移ることになりました。その時から今春まで、足かけ17年間も単身赴任生活を送ることになるうとは、当時は夢にも思っておりませんでした。小さなマンションが買える位の額は、JRやJALの売りに上げに貢献したのではないかと思います。京大在任中は神経生物学教室（大森治紀教授）の石井孝広先生から指導を受けて、分子生物学的手法を習得しました。野間先生は分

子生物学を使った研究はあまり好きではなかったと思いますが、それを黙許して下さった度量の大きさに改めて深謝したいと思います。生理学の神髄は新しい生命現象を発見し、独自の概念を提唱することに異論はないと思います。その一方で、新しい技術が全く新たな発想を可能にすることも事実であると思います。自分が若かりし頃、パッチクランプ法は最先端の技術で、その魅力に惹かれて生理学を志すものも多かったと思います。若い科学者を引きつけるためには常に技術革新を怠らない努力が必要かも知れません。

さて、今春から着任した久留米大学第二生理学教室（統合自律機能部門）は、初代教授の瀬瀬教三先生以来、神経生理学・一般生理学の分野で錚々たる人材を輩出してきた研究室です。畏敬の念をもって見ていた生理学教室を担当することになり、光栄に思うと同時に責任の重さを改めて感じています。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしく御願ひ申し上げます。

略歴

1985年3月	九州大学医学部卒業
1991年3月	九州大学大学院修了（医学博士）
1992年4月	オックスフォード大学生理学研究所 博士研究員
1994年3月	京都大学医学研究科 助手
2000年10月	同 講師
2004年6月	自治医科大学生理学講座生物物理学部門 教授
2011年4月	現職